

聖書の言葉

平和を実現する人たちは

幸いである。

その人たちは

神の子と呼ばれる。

マタイによる福音書5章9節

シャロームタイムズ

2007年8月19日 (日) 発行

宗教学人

野毛山キリストの教会

〒220-0042 横浜市西区老松町30番地

平和聖日

去る八月五日(第一主日) 野毛山キリストの教会では平和聖日として礼拝をささげました。奈良昌人牧師より十字架にかけられ、命を捨ててまで人に仕えられた主イエス・キリストの福音、神の平和を告げるものとしてこの世に使わされた使徒達のように、私たちも「平和を告げる者」になりたいと思えますとのメッセージがありました。

午後、「平和を語る会」では、戦争を体験された姉妹のお話を聞き、そして去る七月二十七日に開催されたサマーバイブルスクールにおいて「いのち」について考えたことが報告されました。

その後、戦争を知っている世代、知らない世代が一緒にグループとなり、すいとんを食べながら戦争の話の聞き、とても貴重な時間を過ごしました。毎年、このような会を持つことは本当に大切なことです。これからも、戦争の悲惨さ、恐ろしさ、語り継ぎ、平和の尊さ、大切さを受け継いでいく思いを持ち続けていきたいと思えます。

出席者 55人 礼拝者 64人

伝えよう! 戦争の恐ろし

金児 和子

今年も平和を語る会の時期がやって参りました。日本が戦争に敗れて今年で六十二年になります。日本はその戦争を大東亜戦争と呼んでいました。日本の海軍がハワイの真珠湾(パールハーバー)を攻撃してアメリカと戦いが始まったのです。一九四一年(昭和十六年)二月八日の事でした。その頃、私は国民小学校の五年生だったと思います。戦争がどんなにむごい事か何も知らされず、ただ「欲しがりません勝つまでは」という標語のもと、不自由なことも我慢して日々過ごしました。

日本の人たちは日本は神の国だから神風が吹いて絶対負けることはないと思われていました。男の人には「赤紙」と言う召集令状がきてどんどん軍隊に入隊していききました。坊主刈りになった出征軍人を町内の人々は「パンザイ、パンザイ」と日の丸の小旗を振って送ったのです。「戦争なんて行きたくない、もっともつと好きな絵を描き続けたい」と思っていた画学生もいた事でしょう。長野の上田にある無言館に行った時、若くして亡くなった画学生の絵を見てそう思いました。送り出す家族も決して喜んで送ったわけではなく、悲しみもあつたでしょう。でも、そんなことを口に出したら、非国民として非難されたのです。私が女学生になった頃はほとんど勉強をすることはなくなりました。私は、働き手のなくなつた農家へ勤労働員として手伝いに行きました。食料のない時でしたので、少しのごはんを水と小麦粉をまぜて、おやきのようにして出してくれたのを喜んで食べていた記憶があります。二つ違いのすぐ上の兄は中学に行っていたが、先生から飛行予科練生として志願するようにすすめられ、入隊しまし

た。予科練の制服は格好いいものでしたが、訓練は厳しく、訓練を終えた学生達は飛行機に乗って戦いに出発して多くの若い命を落としました。残された女の人たちは国を守るためと、防空頭巾とモンペ姿で火を消す訓練をしたり、竹やりでつく訓練を受けたりしました。その頃、女学校は学校全体が工場となり、何の知識もない女の子がわめく分らず「手回し発動機」なる部品を作る仕事をさせられました。その頃、物が少なくなつたため、特に金属製のものは何でも提出するように言われ、唯一楽しみにしていたお屋のお弁当箱まで提出するように言われて、悲しい複雑な思いで、太い棒で山のようなお弁当箱をたたいてべちゃんこにしました。一番上と二番目の兄は満州に在住して現地で軍属として召集されました。二番目の兄は身体に爆弾を巻きつけられ、敵地に飛び込み肉弾兵として死にました。一番上の兄は、終戦後ソビエトに捕虜として連れて行かれ、食べ物も余り与えられず労働を強いられ、栄養失調で死んだと友人からの手紙で知りました。すぐ上の兄は、訓練が終了しないうちに終戦になつたので、無事に家に戻ってくる事ができました。戦争のため、日本は軍人だけでなく、多くの民間人も亡くなりました。それは外国でも同様だつたと思います。命は神さまから与えられたかけがえのない大切なものです。人と人が殺し合う戦争は絶対やってはいけないことです。今なお戦禍の中に苦しんでいる人もいます。みんなが声を大にして戦争反対をしなければなりません。私たちには何ができるでしょうか。考えてみましょう。イエスさまは、剣を取るものは剣で亡びるといわれています。イエスさまは、徹底的に人を愛し、赦される方です。イエス・キリストの平和が一日も早く到来し、世界の人々に特に子どもたちが笑顔いっぱい安心して暮らせる世の中になつてほしいと祈り、私の話を終わらせていただきます。



長崎 (ナガサキ)

広島の数日後の1945年8月9日午前11時2分、B-29 (ボックスカー) が長崎市に原子爆弾ファットマンを投下しました。投下地点は長崎市北部の松山町171番地デニスコートの上空でした。当時、長崎市の人口は推定24万人、長崎市の同年12月末の集計によると被害は、死者7万3884人、負傷者7万4909人、罹災人員：12万820人、罹災戸数1万8409戸にのぼりました。

この一年に亡くなった方 3069人 計 143124人



広島 (ヒロシマ)

1945年(昭和20年)8月6日午前8時15分。原子爆弾リトルボーイは、第33代アメリカ合衆国大統領、ハリー・S・トルーマンの原子爆弾投下への決意により発した大統領命令を受けたB-29 (エンラ・ゲイ) によって投下されました。市内ほぼ中央に位置するT字形の相生橋が目標点とされ、投下された原爆は上空580メートルで炸裂しました。爆発に伴って熱線と放射線、周囲の大気が瞬間的に膨脹して強烈な爆風と衝撃波を巻き起こし、その爆風の風速は音速を超えました。爆発の光線と衝撃波から広島などでは原子爆弾を「ピカドン」と呼ばれました。爆心地付近は鉄やガラスも熔けるほどの高熱になり、石に焼きつけられた人影が今も残っています。また3.5km離れた場所でも素肌で直接熱線を浴びた人は火傷を負いました。爆風と衝撃波による被害も大きく、爆心地から2kmの範囲で建物のほとんど全てが倒壊しました。爆発による直接的な放射線被曝のほか爆発後の放射性降下物(フォールアウト)による被曝被害も発生しました。広島市の北西部に大量の放射性降下物を含む「黒い雨」が降りました。また投下後に救援や捜索活動のために市内に入った人も含めて急性障害が多発しました(二次被害)。当時の広島市内には34万2千の人がいたと言われています。爆心地から1.2kmの範囲では8月6日中に50%の人が死亡しました。1945年12月末までに14万人が死亡したと推定されます。その後も火傷の後遺症(ケロイド)による障害、胎内被曝した出生児の死亡率の上昇、白血病や甲状腺癌の増加など見られました。

この一年に亡くなった方 5221人 計 253008人

八月や はちがつや 六日 九日 十五日



# シャロームタイムズ

2007年8月19日（日）発行

宗教法人

野毛山キリストの教会

〒220-0042 横浜市西区老松町30番地

## いのちの時間

人間・花・魚・木・動物…すべての生き物には「いのち」があり、「いのち」には始まりと終わりがあります。その間を生きている＝いのちの時間ということを知りました。ウサギやねずみの一生はわずか1～2年。鳥は50年を生きる鳥もいれば2～3年のいのちのものもいます。きれいに羽ばたく蝶の一生は数週間とても短い。たとえ、長くても短くてもいのちの時間にはかわりはないのです。私たち人間もそしてどんなに小さな虫も与えられたいのちの時間を一生懸命生きていることを学びました。そして、最後にいのちの時間をつかってどんなことをしたいか、子どもたちひとりひとりが考えました。

どんな生き物にもいのちがあることを知り、いのちの大切さを感じる貴重な時間を過ごしました。

参考文献『いのちの時間』（新教出版社）  
作・プライアン・メロニー

サムエルグループ

小学校一年生

## バングラディッシュのおともだち

「いのち」という抽象的なものを若い子どもたちが考えることはなかなか難しいことです。幼稚科の子どもたちは、まだまだ実体験の絶対量が少ないために、頭の中で想像して考えることには限界があります。そこで、幼稚科ひつじグループの分級では、できるだけ具体的な方向から「おなじいのち」ということを考えていきたいと思ってきました。ちょうど、教会で国際NGOプランジャパン（旧フォスタープラン）に対する寄付を行いました。プランジャパンは、途上国で貧困に苦しみながら生活している子ども達の生活向上を目的として様々な活動をしている団体です。フランスボンサーになると現地の子どもを1人紹介されて交流を持つことができます。今回紹介されたのは、バングラディッシュの3歳の女の子Ayrinちゃんでした。Ayrinちゃんはひつじグループの一番小さい仲間とちょうど同じ年頃です。しかし、日本で暮らす私たちには考えられない程、貧しく厳しい環境に生きています。プランから送られてきたAyrinちゃんの写真を見ながら、世界には日本とは違う厳しい生活を送る人たちが大勢いること、しかし、その人たちも皆私たちと「おなじいのち」をもって、幸せに暮らしたいと願っていることなどを話しました。そして、Ayrinちゃんに絵の手紙をかくことにしました。子どもの中にはプレゼントとして紙飛行機を折る子どももいました。一人ひとりがAyrinちゃんを喜ばせたいと考えて、一生懸命手を動かす時間を持ちました。そしてさらにAyrinちゃんへの一言メッセージを考えて、「平和の木」に飾りました。同じ年頃の外国のお友だちAyrinちゃんのことを思い出してくれたらと思います。

ひつじグループ

幼稚科

## 生きていくということ

小学校高学年



1アグループ

『いのちのおもみ』『たいせつなあなた』という2冊の本を読み、その内容から子どもたちに「いのち」について考えるきっかけを与えられれば良いと思ひ、分級の時間を持ちました。皆たった一つのいのちを与えられ、かけがえのない大切な存在として生きています。しかし実際には、その“大切ないのち”が正しく理解されていないのが現状ではないでしょうか。偏見や差別、思い込みなどによって私たち人間同士でさえ自分や相手のいのちを粗末にしてしまうことがあります。そこで、子どもたちと共に、いのちを大切にするにはどうしたら良いか考えるため、グループごとに相談し、自分たちの“いのち”に対する思いを絵で表現してみました。子どもたちからは、「みんなで心をつながないと平和にならない」「世界の人々がひとつにならなきゃ」「自分のいのちだけじゃなくて、いのちはみんなのもの」といった意見が聞かれました。今回のサマーバイブルスクールのテーマは“おなじいのち”です。小さなアリも大きなゾウも、子どもも大人もいのちの大きさ・重さはみんな“おなじ”ということ、子どもたちなりに感じられたのではないのでしょうか。

オリーフグループ

小学校二・三年生

## コルチャック先生について

ヤヌシュ・コルチャック 1878～1942

ポーランド人 平和を願う子どもの権利を訴えた人。医師でありながら、教育者として子どもたちと共に生きた人。裕福なポーランド系ユダヤ人家庭に生まれながら、全生涯を孤児救済と子どもの教育に投身。孤児院を作って子どもたちのために過ごしました。1942年8月ナチス弾圧下のポーランドにあって、高名だった自身のみの助命を退け、ユダヤ人孤児200余名と一緒にトレブリンカ収容所行き貨物列車に乗り、非業の死を遂げました。彼が考えていた子どもの理想は、死後47年にして国際連合「子どもの権利条約」に表現されました。（日本も1994年に批准）

「子どもはおとなにならない未分化な存在ではない。現在を生きている人間である」。と言われ、さまざまな逆境の中でたくさん子どもたちと過ごし、子どもたちの人間としての尊厳を守るために懸命の努力を続けました。コルチャック先生という人、コルチャック先生がどのように生きたか知ること、おとなは子どもたちを守っていかなければならないと改めて考える時間となりました。

アンテレグループ

おとな・保護者

戦後62年になり、実際に戦争を体験した方が少なくなってきた今日、「知る」ということが大切ということで、特に無差別にたくさんの人を殺した原爆…大量破壊兵器原爆について学びました。本当に戦争は恐ろしくいけないことです。自分たちは何もかえられないかも知れませんが、自分たちができる小さなことから始めようと話し合いました。

神さまによってつくられた私たちは、「かけがえのない自分」と「他の人のいのち」を大切に生きる方をしていきたいです。人がどのような状態であっても、ひとりの人間として尊び、いとおしく思い、大切にしてください。神さまがおられます。そして、神さまのみ心を生き抜かれたイエスさまが共にいてくださることを知り、信じて過ごしていきたいと思ひます。

ジュニアチャーチ

中・高校生 大学生